

## 第2章 すぐれた風土を未来への遺産に

### (1) 風土自治の大切さ

広く世界に目を転じると、文明の前途をリードするスイスのダボス、環境都市の先駆けであるドイツのフライブルグ、イタリア・ピエモンテ州のブラから発したスローフード運動<sup>※4</sup>、あるいはフランス・コレーズ県の田舎町コロージュから生まれた「美しい村」運動<sup>※5</sup>など、地方の小都市や草深い村が世界を揺さぶるメッセージを送り出しています。

翻って軽井沢町は、熱い生命力をはらんだ浅間山が涼風を産みその麓に清烈な水を噴き出すという母なる大地に抱かれています。

このすぐれた風土的個性を次の100年に向けての資産として守り世界の英知が訪れ、ともに語り、智慧を出しあうハイレベルなサロンとして、日本の未来文明を探り合うことができれば、なんと素晴らしいことでしょうか。これを風土自治圏の確立という考え方で整理してみます。

風土自治圏とは、自然の大地とそこに生活する人々の営みの融合したふるさとにほかなりません。なつかしい未来のふるさとを創りましょう。

その風土にすぐれたデザインを施すためには、人々が自然を正しく理解し、評価することが大前提となります。そのうえで時には手を加え、時には手を引いて調和を保ち、その地域特性を最大限活かすセンスが求められます。

これからの軽井沢に必要なことは、すぐれた風土の質をさらに高いレベルに引き上げるために、地元住民が風土に対する認識を深め別荘住民や来町者を良きパートナーとして、自らのふるさとを自らの責任で守る意識を持つことです。

まちの姿、生活の規則を定めるには、自然保護対策要綱のように行政の果たす役割に加えて、行政の手が届かない町民の生活や感情の成り行きが問題になります。住民の自主的な参画を促しながら行政と町民の協働によって成熟する風土自治こそが、軽井沢をより良いふるさととして成長させるでしょう。

そこで、風土自治を実現するため次の3つのデザイン領域を提案します。

## (2) 風土をデザインする3つの領域

### ○地域社会をデザインする

高原保養都市軽井沢を構成する人々は色々と、生き方、考え方も多種多様です。それだけに人と人の絆をどう紡ぎ出すかは、未来に向かってますます大切な視点になります。

そのために、徒歩・自転車を含む多様な交通システムで結ばれたコミュニティの中にスポーツ参加施設、共同作業農場、互助的福祉施設などの種地を作って、もう一歩進んだ地域社会デザインを施す必要があります。特に、まちなかには町民が集う憩う広場をたくさん組み込んでいかねばなりません。従来の公園をモデルチェンジして、庭園のような山水のなかに、コミュニティの行事、社交の場としてのまちの賑わいを取り込んだ「まちニワ<sup>※6</sup>」を編み上げてはどうでしょう。

様々な風土性を産み出す実験農園、里山復元拠点、食文化創成などの作業場が組み込まれれば、公園は入り会い地のような性格を持ち、住民が主体的に活用できる共有地=コモンズ<sup>※7</sup>の実現につながるでしょう。

### ○環境をデザインする

22世紀にかけて、人類の共通テーマの一つは持続可能な地球管理であり、それは、国家にとっても、地域にとっても、個人にとっても重い課題です。

#### 用語解説

##### ※4：スローフード運動

1986年にイタリアで始められた国際的な社会運動。ハンバーガーショップなどのファーストフードに対抗する考え方で、土地の伝統的な食文化や食材を再評価し、それを楽しみ、人が生きていく上で欠かせない食の喜びを取り戻そうとする運動。

##### ※5：「美しい村」運動

小さな村々に残る質の高い歴史遺産の価値向上や保護と、観光の促進を目的として1982年に設立されたフランスの最も美しい村協会によって始められた社会運動。その後、同様の運動がベルギーやイタリア、カナダや日本にも広がっている。

##### ※6：まちニワ

ニワ(二ハ)はかつて「庭」と、共同体の行事の場所である「場」というふたつの意味を持つ言葉であった。これに注目した中村良夫により提唱されたもので、山水の庭と共同体の場である「まちニワ」を町に点在させることで居心地の良いまちを目指す考え方である。

##### ※7：共有地=コモンズ

共有地やコモンズは、ある集団が共有して管理運営する土地の意味。ここでは、新しい公共空間のあり方として、地域あるいは趣味関心を同じくする人たちが、地域の魅力向上も目指し主体的な活動をおこなう場を意味している。

特に化石エネルギーや原子力エネルギーの消費を最小限に抑え再生可能エネルギーに切り替えていくうえで、軽井沢町は先進的なモデル都市の実現を目指す力を持っています。太陽光・熱や地熱の活用、燃料電池自動車の導入、さらには廃材木やペレット燃料の有効利用など、町民一人ひとりの小さな協力が大きな効果となり、町が目指しているスマートコミュニティ<sup>※8</sup>の実現につながります。

また LRT<sup>※9</sup>の導入をはじめとする公共交通の整備、パーク&ライド<sup>※10</sup>や自転車交通の導入、コンパクトシティ<sup>※11</sup>化による歩いて暮らせるまちづくり、電線ゼロ、看板ゼロ、排気ガスゼロなどの目標も含めて環境問題を生活の中に取り込む「環境デザイン都市」の宣言なども検討すべきでしょう。

このように環境をデザインすることは、都市の環境を快適にするだけでなく、さらにそれを取り巻く林野、農地に目を向けます。里山に生きる生物や植物を育て、きれいな川を守り、土砂崩れを抑え昔の軽井沢の草原的な故郷の姿を復元しながら、健やかな母なる大地を守り育てます。この点で農林関係者の果たす役割は大きくなるでしょう。

## ○創造活動をデザインする

人々の活力の増進は、豊かな生命力の持続につながり、まちづくりの原点となります。そのためにも、慕わしいふるさとのでこぼこの大地を踏み締め、季節や天気とともに変わるその手触りと表情を感じとりながら、浩然の気を養うことが何よりです。そして、氾濫する電子メディアに溺れて、ともすれば現実感覚を見失いがちな若者を、変化に富んだ大地のなかへ連れださねばなりません。母なる大地こそが心身の元気の泉だからです。

さらにまた、生命力の発露としての芸術の創造に加わることも、人々が元気を浴びる大いなる機会です。皆で美味しい料理を美しく盛りつける食文化の工夫、弱者への支え、家族の繁栄と継承、生き物への愛情、美しい星空への驚嘆などによって、自ずから湧いてくる生きる力と元気を培い、支援することが大きなテーマになります。軽井沢の高原や里山には、それを実現させる力が秘められています。

風土の懐から産まれる新しい消費生活のスタイルは、未知の経済的な創造活動と呼び覚ますに違いありません。それが地場産業です。